渡辺　美季

# Ⅰ「琉球交易港図屏風」考

**はじめに**

「琉球交易港図屏風」（浦添市美術館蔵）［**下図**］には、琉球王国の港町・那覇のにぎわいと、首里城を中心とする城下の様子が俯瞰的に描かれている。

絵図の主役は、中国－琉球を往来する琉球の官船・唐船（トーシン）で、空砲を放って到着を知らせ［a］、曳船に曳かれて港口にさしかかる進貢船（帰唐船）［b］や、港内に停泊する接貢船が描かれている［c］。いずれも赤を基調とした中国式ジャンク型の大型船舶である。帰唐船には、丸に十文字の旗を掲げた薩摩役人の小舟が荷改めのために近づこうとしている［d］。

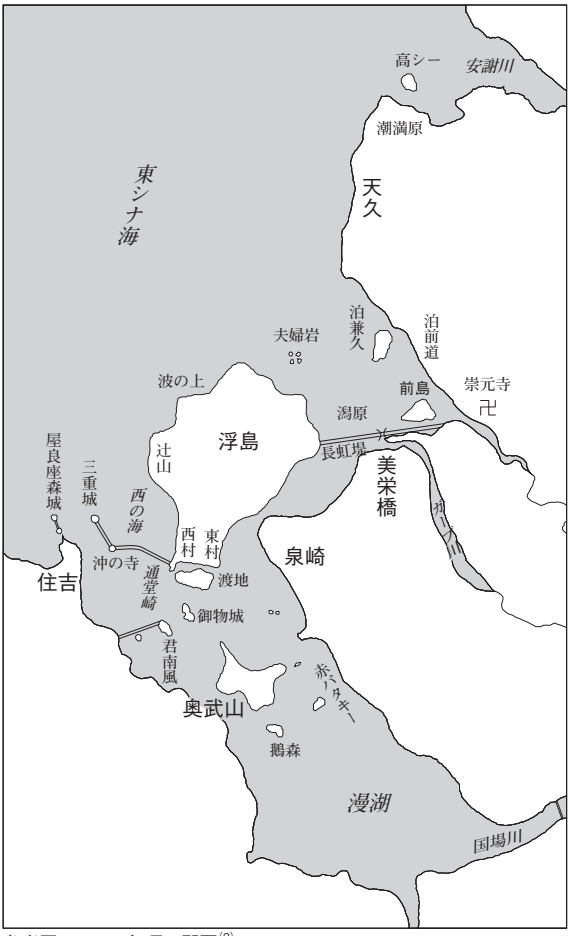
港内では、サバニと呼ばれる３艘の小舟（爬竜船）による船漕ぎ競漕（ハーリー）［e］が行われ、その周辺に停泊する一本マストの大和船（薩摩船）や、小舟・屋形船から琉球人・薩摩人がハーリーを見物している。陸上でも薩摩役人の一行［f］を含む大勢の人々がハーリーを見物し、その中には赤い着物姿の遊女が入り交じっている。

絵図左上には、港内に投網して漁をする小舟［g］と、船舶や周辺住民の貴重な水源である落平（ウテインダ）の湧水を汲む水売船［h］が描かれている。

絵図右方に目を転じると、波之上宮（なみのうえ）［i］・護国寺［j］・天尊廟［k］などの宗教施設が建ち並び、絵図右下には潟原（かたばる）の塩田［l］が広がっている。塩田では製塩作業とともに、競馬が行われている。絵図右隅では琉球高官の行列［m］が橋を渡っている。潟原の上方には泊港を有する泊村［n］があり、中国人漂着民と見られる人々が描かれている。絵図右端には、国王の霊位を祀る崇元寺［o］や王家の菩提寺である臨済宗の円覚寺［p］、首里城［q］が連なっている。

この屏風は、19世紀（近世末～明治期）に制作されたと考えられ、当時の生活文化に関わる豊富なモチーフが含まれている。[(1)]「人々の日常生活を図像資料から引き出して、特定の過去を知る手がかりとする」［福田 2007］という生活絵引の編纂目的にふさわしい、魅力的な素材と言えよう。

「琉球交易港図屏風」全体図（次ページの参考図も参照のこと）




参考図：1700 年頃の那覇[2]

## 1　那覇港を主題とする屏風群

現在「琉球交易港図屏風」とよく似た屏風が 4 点、屏風から軸装に改められたとみられる絵図 1 点が確認されている。いずれも、中国から帰国した進貢船を中心に那覇と首里（あるいは那覇のみ）を俯瞰する構図で、港周辺のにぎわいを描くものである。またハーリー（船漕ぎ競漕）やその見物人が描かれている点でも共通している。なかでも「琉球交易港図屏風」を含む 3 点の屏風（後述の①～③）は著しく類似しており、同じ工房で制作された可能性が指摘されている［板井 2008］。[3]

「琉球交易港図屏風」の性質や内容を理解するためには、これらの類図の全体像の把握が必要であり、かつ有効であろう。そこで本稿ではまずこの課題に取り組みたい。なお管見の限りで 6 点の屏風全てを扱った研究は、各図に描かれた船舶の比較検討を主眼とする［板井 2008］のみである。

### (1) 概要

「琉球交易港図屏風」を含む計6点の屏風（ただしうち1点は掛軸装）の概要と収蔵の経緯、主な特徴は次の通りである。

①琉球交易港図屏風［1章・絵引］
浦添市美術館蔵
紙本着色、縦120.0㎝　横290.0㎝
六曲一隻、19世紀
**収蔵の経緯**：1886（明治19）年頃に沖縄に赴任した鹿児島の警察官・高良八十八（こうらやそはち）氏が、土産物として沖縄で入手した屏風から絵の部分だけを持ち帰ったとみられ、氏の遺族から、1987（昭和62）年に浦添市博物館準備室に寄贈された。その後、同美術館で屏風に改装・修復された［謝敷1998a、安里2009］。
**主な特徴**：透明感のある色彩で、那覇港と首里を描く。②・③と極めて類似しており、両図と比べて、描かれた内容に実態・事実をより反映している可能性がある（2に後述）。泊村に中国人（清人）漂着民と見られる人々が描かれている唯一の屏風である。

②琉球貿易図屏風［1章・参考図版Ⅰ］
滋賀大学経済学部附属史料館蔵
紙本着色、縦175.0㎝　横343.6㎝
六曲一隻、19世紀
**収蔵の経緯**：1962（昭和37）年に彦根市の松井六三郎氏から寄贈された［岩崎2001b］。2000年に行われた修復作業の際、下貼文書から文政末年（1830年頃）に作成された薩摩藩江戸藩邸の帳面が発見された［岩崎2001a］。
**主な特徴**：①・③と極めて類似しており、3図の中では最も画面が大きい。①と同じく透明感のある色彩で那覇と首里を描く。進貢船（帰唐船）の荷改めに向かう薩摩役人が乗り込んだ4艘の小舟に「唐物方」の旗が描かれている［豊見山2004a］。国廟である崇元寺の記載が宗元寺、道教の天尊廟の記載が天孫（廟）となっている。

③琉球進貢船図屏風［1章・参考図版Ⅱ］
京都大学総合博物館蔵
紙本着色、縦94.5㎝　横255.0㎝
六曲一隻、19世紀
**収蔵の経緯**：1932（昭和7）年4月に京都大学国史研究室が購入した（購入元は不明である）。
**主な特徴**：①・②と極めて類似しており、3図の中では最も小さい。このため両図には描かれている首里城が描かれていない。また沖合（上部）の渡名喜島や慶良間諸島も描かれていない。水分の少ない顔料で描いたと見られ、①・②に比べ不透明感が強い。また①・②の繊細な筆遣いに対し、やや太めの線による力強い筆遣いが特徴的である。

④琉球交易港図［1章・参考図版Ⅲ］
浦添市美術館蔵
紙本着色、縦111.6㎝　横55.7㎝（3幅共、修復後）
掛軸装（3幅）、19世紀
**収蔵の経緯**：1993（平成5）年に沖縄県内在住（当時）の堀川政吉氏より寄贈された。堀川氏は義父の上原氏（名前は不詳）よりこの図を贈られたという。上原氏がなぜこの図を所有していたのかは不明である。
**主な特徴**：本来は屏風仕立てであった作品の四方が断ち切られ軸装に仕立てられたと考えられ、[4] 欠損部がある。全体的に劣化しており、横折れや亀裂による損傷が激しく、これに伴う剥落・欠失も多い［関地・庄野1998］。

構図は①～③の左4曲とほぼ同じ、すなわち右2曲（那覇西岸部・首里）が切れた状態である。画風は①～③とは異なっており、別の作者ないしは工房の作と考えられる［板井2008］。①～③および⑤同様、左端の落平（ウテインダ）に2本の樋が見えることから、樋が1本から2本に増設された1807年以降に描かれたと見られる。

この図の最大の特徴は、琉球国王を冊封する中国

皇帝の使者船・冠船（封舟）2隻が描かれている点である。右軸上部に描かれた1隻が大砲を放って入港を知らせ、中央には「奉旨冊封」の旗を掲げたもう1隻が港口に迫っている。いずれも赤を基調とした船体である。その手前に「捧詔冊封」の旗を掲げた琉球の進貢船が航行している。護送の船であろうか。進貢船は赤と黒で描かれ、冠船とは異なる配色である。右下の三重城には、太鼓やラッパ、旗を持つ人々が立ち並び冠船を出迎えている。中国伝来の道中楽である路次楽（ろじがく）と思われる。

中央軸には、2隻の琉球官船が描かれている。中国往来の官船である唐船（トーシン）（進貢船・接貢船など）か、あるいは薩摩に派遣される楷船であろう。その後方の、スラ場（スラ所（どころ））と呼ばれる造船所には、造船中と見られる唐船1隻が描かれている。これも他図には見られない特筆すべき点である。下部の海上道路の中ほどに見える黒い線で描かれた物体は、船の鉄錨であろうか。左軸には、上方から落平・御物城（おものぐすく）・ハーリー・渡地（わたんじ）などが描かれている。落平と渡地付近の海上には水売船が見える。

さらに写真画像を肉眼で観察した限りでは、この図には、他図に描かれている薩摩船や薩摩役人が描かれていないようである。2隻の冠船とともに、本図を特徴づける非常に重要な点であると言えよう。

⑤首里那覇港図屏風

沖縄県立博物館蔵

紙本着色、縦98.8㎝　横334.4㎝

八曲一隻、19世紀

**収蔵の経緯**：1889（明治22）年に新潟県の山口なる人物が鹿児島で買い求め、その後イギリス人の日本研究者フランク・ホーレーの手に渡った。1959（昭和34）年に沖縄県立博物館の前身である琉球政府立博物館が購入した。以前は「琉球国祭神の図」という画題が付けられていた。かつて琉球国王から島津藩主へ献上されたという伝承がある［沖縄県教育庁文化課1978］。

**主な特徴**：八曲という横長の画面ゆえに、他図では省略ないしは一部分しか描かれていない首里城の全体が描かれている。またサイズの関係で他図には描き切れなかったとみられる要素――識名御殿（右端）や真玉橋（左端）など――も描かれている［九州国立博物館2006］。波之上宮沿岸と沖合に、白青赤の三色旗を掲げた仏（または露・蘭）の船舶が1隻ずつ描かれている［板井2008、堀川2008］。

⑥那覇港図屏風

首里城公園蔵

紙本着色、縦108.0㎝　横247.5㎝

六曲一隻、19世紀

**収蔵の経緯**：数次にわたる所蔵者変更を経て、2000年より首里城公園が所蔵している。

**主な特徴**：他図とは異なり、垣花からの視点で那覇のみをアップで描き、首里や沖合といった遠景は切られている［首里城公園管理センター2002、九州国立博物館2006］。最も絵画的な完成度の高い作品で、細部まで描き込まれているが、どの船も寸詰まりに描かれるなどデフォルメも目立つ［板井2008］。ハーリーとともに、ユッカヌヒー（旧5月4日）に行われた玩具売りの様子が描かれている点が特徴で、進貢船や馬の玩具が確認できる［首里城公園管理センター2002］。

〔備考〕写真画像について

この絵引には①～④の詳細な写真画像を収録している。④は［関地・庄野1998］に復元前後の状態を示すカラー写真が掲載されているが、詳細な画像を載せるのは本書が初めてである。

本書に画像を収録していない⑤・⑥は、［沖縄美術全集刊行委員会1989］に詳細な写真画像が掲載されている。また［九州国立博物館2006］にも、①～③および⑤・⑥の詳細な写真画像が掲載されている。

### (2) 構図

「琉球交易港図屏風」を含む屏風群の最大の特徴は、那覇港を俯瞰的に描く構図であろう。堀川彰子氏によれば、那覇を俯瞰的に描こうとする試みは18世紀前半に首里王府の絵師・殷元良（座間味庸昌、1718-1767年）によって初めて行われた［堀川2008］。これは比較的自然な俯瞰的絵図であったが、[5]その後、殷元良に師事した王府の絵師・呉著仁（＝呉著温・屋慶名政賀、1737-1800年）が、この構図を大きく変化・発展させ、1770年代に制作した「首里那覇全景図屏風」[6]において、那覇港の中心上空を想定して空間を極端に湾曲させる構図を創始した［同前］[7]。これが一連の屏風群に受け継がれたと考えられる［同前］。

### (3) 制作年代

屏風群の制作年代に関しては、那覇沿岸部の湧水である落平の樋に着目した謝敷真起子氏の研究が嚆矢をなす［謝敷1998b］。謝敷氏は①を分析する中で、従来1基であった水樋が、1807年12月に2基に増設された史実に着目し、制作年代の上限を1808年、下限を原蔵者・高良氏が①を入手した1887（明治20）年頃とした［同前］。落平の2本の樋は、①～⑤に共通して描かれていることから、少なくとも上限に関しては謝敷氏の推定が該当するものと考えられる。

その後、岩崎奈緒子氏が、2000年に行われた②の修復作業で下貼文書から文政末年（1830年頃）に作成された鹿児島藩江戸藩邸の帳面が発見されたことから、屏風の成立は1830年代後半以降であり、「明治期には下らない」と推定した［岩崎2001a］。

さらに同じく②に関して、豊見山和行氏が、進貢船（帰唐船）の荷改めに向かう薩摩役人が乗り込んだ4艘の小舟に薩摩藩の「唐物方」という部署の旗が描かれていることを指摘し、この部署が1844年に「産物方」と改称されたことから、先行研究の成果と合わせて1830年代後半から1844年までの期間に成立したものと結論づけた［豊見山2004a］。「唐物方」と記されてはいないものの、①・③にも進貢船（帰唐船）の荷改めに向かう薩摩役人の小舟が②同様に描かれており、豊見山氏の推定年代が適用できるものと思われる。

一方、⑤に関しては堀川彰子氏が、白青赤の三色旗を掲げた2隻の船舶が描かれている点に着目し、絵図中の旗に一致する国旗はないものの、同配色の国旗を持つ仏・露・蘭の内、最も早期に琉球を訪れたのが1844年の仏船であることから、制作年代の上限をこの年とする［堀川2008］。ただし1844年に来琉した仏船はアルクメーヌ号1隻であり、船数は一致していない（次の仏船来琉は1846年で船数は3隻である）［大熊1971］。

### (4) 描かれた「瞬間」

ところで屏風群に描かれたのは、どのような「瞬間」なのであろうか。豊見山和行氏は②の分析から、潟原での競馬は旧正月21日か27日、ハーリーは旧5月4日に実施される慣わしであったこと、進貢船の帰国は概ね旧5～6月で、抜荷（密貿易）防止の観点から帰港時には関係者以外の船舶の接近は禁じられており、ハーリーが同時に実施されることは実際にはなかったであろうことを指摘し、那覇の「ある瞬間」ではなく、「同時には発生し得ないものも含む複数の瞬間」が描かれているとする［豊見山2004b］。ハーリーは全屏風に、進貢船の帰港は④を除く全てに描かれ、④に描かれた冠船入港時にも進貢船同様かそれ以上の監視体制が敷かれたものと考えられるため、豊見山氏の指摘は全図にほぼ該当するものと思われる。

一方で、①には泊村に収容される通例であった中国人漂着民が、唯一描かれている。琉球各地に漂着した外国人は、18世紀前半頃から、漂着地から自船で直接帰国する者を除いて、原則的に泊村に転送され、村内に設けられた仮小屋に収容されて、帰国（多くは送還）の時を待った［渡辺2003］。その地点を比較すると、①には中国人（清人）の一行とと

もに、仮小屋や見張り小屋までもが確認できるが、②・③は空き地になっている［1-(4)-①～③］。すなわち①には、何らかの漂着事件が発生し、その難民が泊村に収容された、極めて時事的な「瞬間」が反映されている可能性が高いのである。この光景が描かれた理由は不明だが――絵師がその時に見たものがたまたま描かれたのであろうか――、このような時事的な要素も含め、屏風群に描かれた可能性のある「瞬間」については、今後もより検討を進める必要があると思われる。

### (5) 制作目的

では屏風群はどのような目的で誰に向けて制作されたのであろうか。確実に言えることは、少なくとも④を除いて、中国（清朝）向けに制作されたものではないということである。[8]

琉球は1609年に薩摩の島津氏に敗北し、中国（明朝）と日本（江戸幕府・薩摩藩）に二重に従う王国となった。その後1644年に明から清へと中国の王朝が交替すると、琉球は清と新たな君臣関係を結んだが、日本との関係が清の不興を買うことを恐れ、清に対して琉日関係を隠蔽する特別な政策を採るようになった［紙屋1990］。また新興の大国である清と、琉球支配を原因とした摩擦が生じることを避けたい幕府、その意向を汲んだ薩摩も、琉球の隠蔽政策に協力した［同前］。こうして清を中心とした東アジア世界においては、琉球と日本との関係は少なくとも表向きは「存在しないこと」となった。従って、薩摩役人や薩摩船が描かれている④以外の屏風類は、決して清や、その朝貢国である朝鮮に向けて描かれた作品ではないことは明らかである。

では日本に対してはどうであろうか。豊見山和行氏は②に関して、薩摩藩の江戸藩邸において屏風に仕立てられた可能性が高いとする岩崎奈緒子氏の指摘や［岩崎2001a］、唐物方・薩摩船・薩摩役人が明瞭に描かれている点などから、この絵図の注文主が薩摩藩、広く言えば日本（ヤマト）であった可能性を指摘する［豊見山2004a］。

1-(4)-①

1-(4)-②

1-(4)-③

1609年の琉球侵攻後、薩摩藩は琉日間のヒト・モノの動きを自らの統制下に置いたため、琉球へ渡航できる日本人は、藩から琉球監督のために派遣され那覇に駐在する在番奉行衆と、藩の委託を受けて琉球の年貢米・砂糖などを運送し、代わりに琉球で商売を行う薩摩船の関係者（船頭・水主など）にほぼ限られるようになった。こうした琉薩間の交流に

より薩摩に渡ったとみられる琉球の芸術品・美術品（著名な書家の作品等）は、現在も鹿児島県各地に多数散在しており、[9] 那覇・首里の屏風もこの交流の中で薩摩――広くは日本（ヤマト）――へ向けて制作された可能性は大いにあるだろう。

或いはより具体的に、琉球を訪れた薩摩の在番奉行衆や海商らの土産として作成されたのかもしれない。[10] 実際①は、1886（明治19）年頃に沖縄に赴任した鹿児島の警察官が土産物として入手した屏風であり、王国時代に屏風が薩摩への土産であったのであれば、王国滅亡（1879年）後にも、その遺風が存続していた可能性がある。

また②・③の来歴などから、屏風の一部は薩摩を通じて日本（ヤマト）にも流入・流布した可能性が高いと考えられる。これらの異国情緒溢れる屏風は、南蛮屏風などとも通じる魅力をもって、「鎖国」下の日本の人々に珍重されたであろう［九州国立博物館 2006］。

なお④には、他図に描かれている薩摩船や薩摩役人が見られない。先述した清に対する琉日関係の隠蔽政策のため、清使（冊封使）の乗る冠船入港時の那覇に薩摩の船や人が描かれないのは、現実に即して言えば当然のことであるが、必ずしも現実を反映する必要のない観賞用絵画において、他図に共通する日本的要素が省略されているのはなぜであろうか。差し当たり思いつくのは、［a］清に向けて制作された、［b］国内消費用に制作された（≒来琉する清人の目に触れる可能性がある）、［c］単に事実を反映して制作された、といった可能性だがどれも推論の域を出ない。この点に関しては今後の大きな検討課題である。

### （6）制作者

最後に、誰が屏風を制作したのかという点について考えたい。屏風は内容の具体性から全て琉球――恐らくは都市部である那覇か首里――で制作された可能性が高いと考えられるが、具体的な制作者や工房に関する手がかりは今のところ皆無である。

ただしあくまでも推測であるが、②に関しては「おそらく首里王府お抱えの絵師の手になる可能性が高いと推測されるものの、その詳細は不明である」［豊見山 2004a］、「漆器製作をつかさどる貝摺奉行所の絵師が描いたものではないかと考えられる」［安里 2000］という指摘がある。貝摺奉行所とは首里王府の工芸機関で、所属の絵師や貝摺師――多くは下級の士（士族）――が、王府の用にかかる絵画や漆器――清・幕府・薩摩への献上品も含まれていた――の制作に当たっていた。

また6点の屏風群の中で最も絵画的な⑥に関しても、「人物表現、爬龍船・進貢船などの描写から、貝摺奉行所に配置されていた絵師のようなしっかりとした技術を持った人物の筆になるものと思われる」との指摘がある［首里城公園管理センター 2002］。

一方、①～③および⑤を比較した加藤健二氏は、共通する幾つかのモチーフの中にある相違点から各図の描かれた時期が異なっていること、ヒトの図像の表現に見られる描き進め方や彩色方法のパターンから共同制作の可能性や工房の存在がうかがえることを指摘している［加藤 2007］。

加藤氏の指摘に、先に挙げた「貝摺奉行所の絵師による制作」という推論を加味すると、共同制作の場として自ずと貝摺奉行所の可能性が浮上するが、薩摩藩邸で屏風に仕立てられたと見られる（≒藩が注文主であった可能性がある）②は、琉球の国廟・崇元寺を宗元寺、道教の天尊廟を天孫（廟）と記しており［1-(6)-①・②］、これは王府機関による表記としては一般的ではないように思われる。従って貝摺奉行所そのものというよりは、その絵師が何ら

かの形で関与した民間の（私的な）工房で、官・民ともに参加可能な市場向けの商品として制作された可能性が高いと言えるのではないだろうか。

1-(6)-①

1-(6)-②

## 2.「琉球交易港図屏風」の比較検討
### —生活文化を中心に—

次に本書で絵引として取り上げた「琉球交易港図屏風」（①）および①と極めて類似する「琉球貿易図屏風」（②、参考図版Ⅰ）・「琉球進貢船図屏風」（③、参考図版Ⅱ）を、日常的な生活文化に関わる描写を中心に比較検討したい。

なお本書には、これまで詳細な写真画像が刊行されてこなかった「琉球交易港図」（④）も参考図版Ⅲとして収録したが、すでに触れたように④は①～③とは性質が異なる絵図であるため、ここでは比較分析の対象としないこととする。

### (1) 落平・奥武山

屏風左上の落平（ウティンダ）・奥武山（おうのやま）付近の描写には、日常生活の場としての那覇港の様子がよく現れている。

落平では、①～③とも湧水が流れる２基の樋を描き、２つの桶を積んだ水売船がその水を汲んでいる。②・③はさらにもう１隻の水売船が見える。①・②は落平の手前に投網をする漁師の小舟が描かれるが、③には見えない。

また①では、奥武山の龍渡寺の鎮守社（社名不詳）ははっきりとした赤で塗られているが［2-(1)-①部分］、②は僅かに赤線を用いる程度、③には赤色は見えない。なお他の部分に描かれた神社は①～③とも赤色に塗られている。

2-(1)-①

2-(1)-②

2-(1)-①部分

2-(1)-③

## (2) 接貢船・ハーリー

屏風左方中央は、那覇の主要な祭礼の一つであるハーリー（船漕ぎ競漕）を中心とした場面である。

①は接貢船の両側に薩摩船が1隻ずつ描かれ、③では接貢船の右手に2隻の薩摩船が描かれる。②は「接貢」の旗が描かれていない。接貢船の上で太鼓を叩く男性は①のみに描かれている［2-(2)-①部分1］。ハーリーの小舟は③のみ横並びに描かれている。

ハーリーの見物客が乗る屋形船の旗頭は①～③とも異なっている。慎思九（泉川寛英、1767-1844年）「那覇綱引之図」に照らすと、①の旗頭は湧田のものであるようだ［鎌倉1982（写真編）：P.286-291］。[11] ①の屋形船には何らかの紅白の物品（食品か）を入れた籠や［2-(2)-①部分3］、鳥面を付けた人物が見える［同部分2］。②には日傘や扇を振り回す人が描かれ［2-(2)-②部分1］、②・③には傘を飛ばされる男性の姿がある［2-(2)-②部分2、2-(2)-③部分2］。

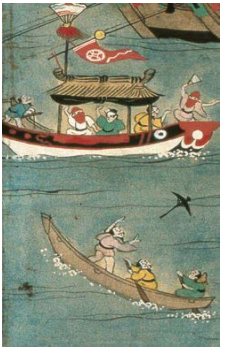
薩摩船の上では、琉球人男性・琉球人遊女（赤地や赤柄の着物）が乗り込んで、薩摩人男性（丁髷・髭なし）とともに見物している［2-(2)-①～③部分4］。日常的な琉薩交流の実態を反映しているのであろうか。

2-(2)-①

2-(2)-①部分1

2-(2)-②部分1

2-(2)-②

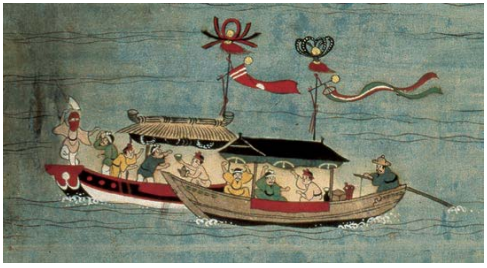

2-(2)-②部分2

2-(2)-③

2-(2)-①部分 2

2-(2)-①部分 3

2-(2)-③部分 1



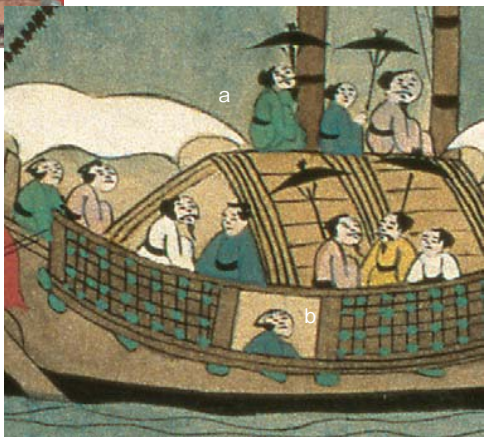
2-(2)-②部分 3

2-(2)-③部分 2

2-(2)-③部分 3

2-(2)-①部分 4

a　琉球人男性
b　薩摩人男性（丁髷・髭なし）
c　琉球人遊女（赤い着物）




2-(2)-②部分 4

2-(3)-②

2-(2)-③部分 4

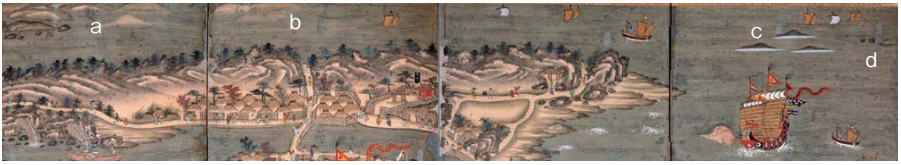
なおハーリーと同様に那覇の主要な祭礼であった綱引（那覇大綱引）は描かれておらず、⑥に描かれたような露店も見えない［豊見山 2004b］。

### (3) 帰唐船・港遠景

屏風中央の上方には、中国から那覇港に到着した帰唐船の様子と沖合の風景が描かれている。

①・②の沖合には、慶良間諸島・渡名喜島・慶伊干瀬（チービシ）が描かれているが、③は慶伊干瀬のみである。帰唐船は、船体・大砲の向きや火炎の色が異なっている。

a　慶良間か　　b　渡名喜か　　c　慶（付箋剝落）　　d　美崎（付箋剝落）



2-(3)-①

a　慶　　b　美崎

2-(3)-③

a　慶良間　　b　渡名喜　　c　慶　　d　美崎

2-(4)-①

2-(4)-①部分 1

2-(4)-②

2-(4)-②部分 1

2-(4)-③

2-(4)-③部分 1

### (4) 迎恩亭・三重城

屏風下方の中央から左にかけては、迎恩亭の薩摩役人を中心に、ハーリーや進貢船を見物する人々の様子が描かれている。

③のみ迎恩亭内の東屋が 2 棟あり、大きい東屋が門に対して横向きに配置されている。迎恩亭の東屋は仮小屋であったため、過去のいずれかの時点の実態が反映されている可能性がある。①のみ薩摩役人と琉球人のそばに酒器・盃・煙草盆のような物品が見える [**2-(4)-①部分 1**]。また迎恩亭の右脇に描かれた屋根付きの小屋の下に、①では桶が、②・③では甕のようなものが置かれている。なお迎恩亭の表記に関して、①に記載はなく、②には「迎恩門」、③には「迎恩」の付箋がある。

迎恩亭から海上の薩摩船に向かう小舟を見ると、②には役人を含む薩摩人とともに、遊女 2 名が乗

2-(4)-①部分２

2-(4)-①部分３

2-(4)-②部分２

2-(4)-②部分３

2-(4)-③部分２

2-(4)-③部分３

り込んでおり、薩摩人１人が薩摩船に手を掛け、まさに乗り移ろうとしている［**2-(4)-②部分 2**］。①には薩摩役人の姿はなく、遊女２名と薩摩人水主（かこ）のみである［**2-(4)-①部分 2**］。

次に三重城に繋がる海上道路に立ち並ぶ見物人から、人物描写を比較する。①～③とも、帯の有無で男女を描き分けているようである。琉球人男性は、髭の有無による描き分けがなされている。髭のない者が若者であろう。子供は赤い着物姿で、多くの場合、母親らしき女性に抱かれるか、父親らしき男性に背負われるかしている。[12] 遊女は赤地ないしは赤柄の衣裳を着ている。扇は白、傘は黒で描かれるが、①のみ傘下の桟の部分が省略されている。団扇を持つ人物もいる。薩摩の役人は、丁髷で髭がないことに加え、日本刀と羽織・袴を身につけている点が特徴である。

### (5) 西の海・若狭

屏風の右手前には、那覇港西岸部の様子が描かれている。

遊里である辻村に近い西の海の沿岸では、漕ぎ寄せた屋形船に遊女が乗り込もうとしている。①では降ろした幕の下から男たちが覗く中、肝入（肝煎）に誘導されて2人の遊女が船に向かっている［2-(5)-①部分1］。②では肝入はおらず、船上の男性の呼びかけに遊女が応じる形をとる［2-(5)-②部分1］。③は船上から呼びかける男性も肝入も描かれており、幕は上げられている［2-(5)-③部分1］。

その右上のバクチヤ（博奕屋）で車座になって宴会を開く人々に対し、崖下から②では男性が、③では女性が手を振っている［2-(5)-②・③部分2］。③の宴では、上半身裸の男性、地べたに倒れ込みそうな男性、両手に扇を持って激しく煽る男性が描かれ、酒に酔いつつブーサー（琉球式じゃんけん）に熱狂している様子が最も強く表現されている［2-(5)-③部分2］。

2-(5)-①

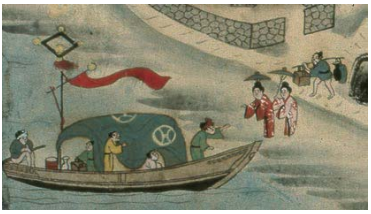
2-(5)-①部分1

2-(5)-①部分2

2-(5)-③

2-(5)-①部分3

2-(5)-②



2-(5)-②部分 1

2-(5)-②部分 2

2-(5)-②部分 3　　a　砂焼場

2-(5)-③部分 1

2-(5)-③部分 2　　a　砂焼所　b　バクチヤ　c　辻

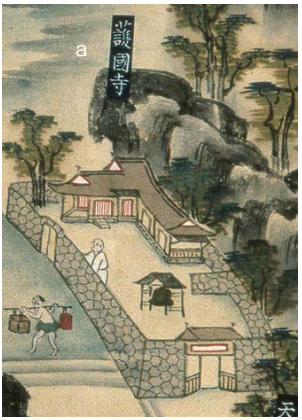
2-(5)-②部分 4

さらに上方の唐守嶽（トウマムイ）前の広場でも宴会が行われているが、この場面では②に上半身裸の男性が見える[2-(5)-②部分4]。全ての宴に遊女が侍っている。なお①・③では鳥居の右手の辻村に遊郭を訪れたと見られる薩摩人の姿が見える。

護国寺は、①では仁王と鐘が[2-(5)-①部分4]、②では鐘が描かれているが[2-(5)-②部分5]、③にはどちらも描かれていない[2-(5)-③部分3]。また寺内に見える僧侶は、①・②では白衣だが、③は黒衣である。

2-(5)-①部分4

2-(5)-③部分3
a　護国寺




2-(5)-②部分5　　a　護国寺

2-(6)-①

2-(6)-①部分1

2-(6)-①部分2

### (6) 潟原・泊村・安里

潟原・泊村・安里（①・②はさらに首里も）を描く屏風右手には、日常生活の要素が多数確認できる。

泊村から泊高橋を経て潟原に至る途中の徒渡しでは、①では傘を差して渡る男性と、子供（？）を籠に入れて運搬する男性が［2-(6)-①部分1］、②では傘を差す男性の代わりに子供を背負う男性が描か

2-(6)-②

2-(6)-②部分1

2-(6)-②部分2

2-(6)-③部分1

2-(6)-③部分2

2-(6)-③

2-(6)-①部分３

2-(6)-②部分３

2-(6)-③部分３

れ［2-(6)-②部分 1］、③にはその全てが描かれている［2-(6)-③部分 1］。なお村内の漂着民収容所に関しては 1-(4) で扱ったのでここでは触れない。

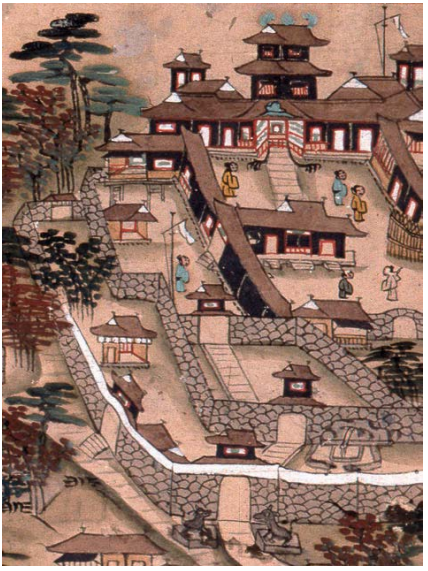
製塩作業が行われている潟原では、①のみ水撒きの男性が描かれていない。駕籠に乗った琉球高官の行列の描写は、①～③ともほぼ同様であるが、②のみ２か所に行列が描かれている。また③の行列末尾で行李を背負う男性は、３図の中では最も深く腰を曲げ苦しそうな様子である。①～③とも崇元寺横の広場で将棋に興じる人々の中に、クバ扇を持つ男性がいる。また①・③には将棋盤の罫線が見える。

### (7) 首里

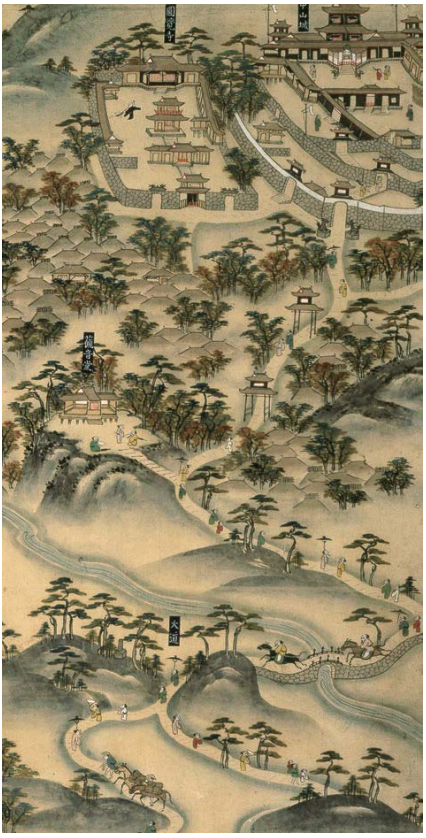
③では首里は割愛されているため、ここでは①・②のみを比較する。

安里から首里城へ至る坂道には、②のみ荷を運ぶ馬が描かれている［2-(7)-②部分 4］。①には描かれている観音堂の円鑑池は、②には見えない。円覚寺の総門は、①では単層構造で左右に仁王像が配置

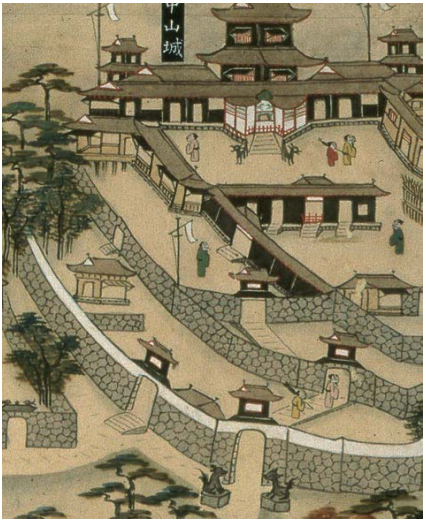
首里城龍樋


2-(7)-①部分１（首里城）

2-(7)-①



2-(7)-②



2-(7)-②部分 1（首里城）

2-(7)-②部分 4

2-(7)-①部分２（円覚寺）

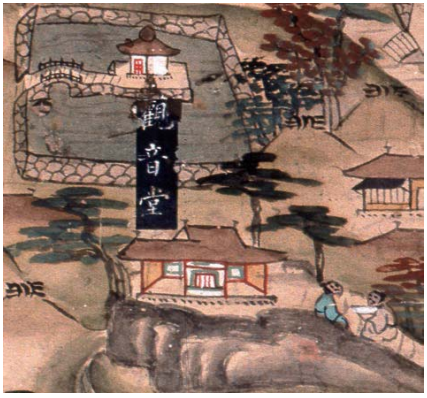
2-(7)-②部分２（円覚寺）

円覚寺総門

円覚寺僧侶

円覚寺総門

円覚寺僧侶




2-(7)-①部分３（観音堂）

2-(7)-②部分３（観音堂）

されているが、②では上下2層で仁王像はない（実態を反映しているのは①である）。また①の鐘楼には青銅色の梵鐘が描かれている。境内に見える僧侶は、①が黄衣、②が黒衣で、箒を手に境内を掃いている。②には塵の舞い上がる様子まで描かれている。

首里城正殿の龍柱（正面欄干の左右）や、歓会門のシーサー（石獅子）は①の方がより粗雑に描かれている印象を受ける。だが、①に描かれた龍樋は、②には描かれていない。先述した円覚寺総門の様子や円鑑池の有無なども鑑みると、①の方が全体的により事実や実態を反映している傾向があるように思われる。[13]

以上、簡単にではあるが①～③を比較した。強い類似性が見られる3図であるが、すでに述べてきたように細部には異なる点が多々存在する。恐らく何らかのベースとなる図を参照しながらも、制作者（絵師）が、自らの感性や生活文化、自身が把握している事実・実態を反映させて描いたのであろう。その意味では、ベースとなる図の上に投影された「ある時点における（1人ないしは複数の）絵師自身の那覇・首里イメージ」の差異こそが、各屏風の細かな相違点を生み出しているものと考えられる。

### 3.「琉球交易港図屏風」の生活絵引編纂

生活絵引は、人々の日常生活を図像資料から引き出して、特定の過去を知る手がかりとするユニークな事典編纂の方法であり［福田 2007］、その前身である『絵巻物による日本常民生活絵引』［渋沢 1965-1968］から発展的に継承された。

その編纂に関わる非常に重要な特色は、事物相互の関連・関係性を重視し、これらを理解できるように、図像を完全に個別事物に分解せず、ある程度の広がりの中で場面を切り取る方法を採用しているという点である［福田 2007］。

「琉球交易港図屏風」は、この絵引編纂の特色に新たな展開をもたらす可能性を有している。それは類図の存在による。[14]「琉球交易港図屏風」には、構図・モチーフともに極めて共通性の高い、しかし細部は様々な点で異なっている類図が現在他に5点確認されている。それらは単なる写本の類ではなく、恐らくは絵図の描かれた時代・場所において実際に生活していた絵師が、共通性の高い構図・モチーフを用いながらも、自らの感覚や知見を多角的に反映させて制作したと考えられる類図である。

本稿ではそのなかでも特に強い類似性を有する「琉球貿易図屏風」（②）・「琉球進貢船図屏風」（③）を用いて、「琉球交易港図屏風」（①）との比較分析を行った。これにより、まず描かれた内容を相対化することが可能になった。例えば3図の中では①のみが、かなりおざなりな筆運びながらも、那覇波上（現・那覇市若狭）の護国寺に仁王像と梵鐘を描いている［**2-(5)-①部分4**］。②は梵鐘のみ、③は双方とも描かれていないことから［**同②部分5、③部分3**］、相対的に見て護国寺に関して①にはより実態が反映されていることがわかる。首里の円覚寺や首里城の描写においても、類図との比較によって同様の傾向が確認できる。

類図との比較分析はまた、従来の絵引のように絵図上の点（事物・行為）を組み合わせた場面として空間を把握することに加え、複数の場面からなる層として、より立体的に空間を捉えることも可能にした。それは描かれた空間の「日常生活における（ある程度の時間幅を伴う）状態」を、より実態に即して理解することに繋がっている。

例えば①～③の屏風が制作されたある一定の期間、泊村の外国人漂着民の収容地の「日常生活における状態」は、漂着民の有無に応じて「仮小屋が建った状態」（相対的に短い期間）と「空き地の状態」（相対的に長い期間）を繰り返すというものだったであろう。この2つの状態の有無からなる「日常生活の状態」は、3図の同地点を並べて見ることで初めて視覚的に捉えることができるのである［**1-(4)-①～③**］。

本稿では①～③のみを比較したが、残る類図（④

～⑥）も加えて比較を重ねれば、より豊かな相対化の視点――それは資料批判の目でもある――を獲得し、「特定の過去の日常生活の実態」に、さらに接近することができるであろう。また①～⑥以外にも、屏風の一部分を切り出してきたかのような風俗画が存在しており、[15]今後新たな屏風が発見される可能性も含めると、類図の比較分析の奥行きは一層広がっていくものと考えられる。

このように生活絵引に、相対化と立体化という選択肢を示した「琉球交易港図屏風」とその類図であるが、一方で検討すべき課題も残されている。その最たるものが、屏風に描かれていない実態の検討であろう。例えば、那覇に確実に存在する幾つかの大規模な墓地はどの屏風にも描かれていない。一連の屏風には、琉球人が外部（恐らくは日本（ヤマト））に対して「見せたい事物・行為」が描かれているのであり、この目的に沿わない実態の一部が、明確な意図のもとに「削除」ないしは「デフォルメ（変形・強調）」されている可能性が高い。一体何がなぜ描かれていないのか――この問題が十分に検討された時に初めて「琉球交易港図屏風」は生活史のインデックスとしての真価を獲得・発揮し得るであろう。なおこの課題に取り組む上でも、類図との比較分析が有効であるように思われる。

【注】

(1) 琉球には、中国福建画壇の影響を受け、さらに琉球独特の細部の表現に独自性を加えていった「観賞用絵画」、表現に中国的絵画技術を応用した歴代国王の肖像画である「御後絵」、大和狩野派の表現の影響を受け、琉球の文化や生活を画いた「風俗画」の３つの領域があると言われており、「琉球交易港図屏風」は風俗画として分類されている［加藤 2007］。
(2) ［沖縄大百科事典刊行事務局 1983（下）：P.73］の図Ⅱをもとに作成した。
(3) ①・②に関しては［岩崎 2001a］も、絵の構図から細部の描き方まで酷似していることから、同じ工房で描かれた可能性を指摘している。
(4) 板井英伸氏によれば、これは謝敷真起子氏・小野まさ子氏の指摘である［板井 2008］。両名は一連の屏風に関する研究会を行い、これらを「読む」作業を蓄積しているが、まだそのまとまった成果は刊行されていないという［同前］。
(5) 殷元良の描いた那覇俯瞰図の模写（1833 年）が、西尾市の岩瀬文庫に所蔵されている。その写真画像は［那覇市歴史博物館 2011：P.3］に掲載されている。
(6) 原本は焼失し、モノクロの写真画像のみが残っている［鎌倉 1982（写真編）：P.239-281］。
(7) なお鎌倉芳太郎は呉著仁を首里城・那覇港の鳥瞰図の創始者と位置づけている［鎌倉 1982（本文編）：P.206］。また同じく呉著仁を一連の屏風の構図の始祖と見る安里進は、18 世紀を通じて首里王府が推進した国土の測量と地図製作事業が、首里城と那覇港を鳥瞰する絵画様式を生み出し展開させていく下地を作ったとする［安里 2000・2009］。
(8) 豊見山和行氏の御教示による。
(9) 残念ながら総合的な調査は行われておらず、従ってまとまったリストも作成されていない。
(10) 豊見山和行氏の御教示による。
(11) 田名真之氏の御教示による。
(12) ②を分析した佐々木利和氏は、子供を背負っているのは圧倒的に「父親」で、子供を抱く形態はすべて「母親」だと指摘している［佐々木 1998］。
(13) 護国寺の仁王像や泊村の漂着民収容所の記載なども実態反映の例として付け加えることができるだろう。
(14) 得能壽美氏の御教示による。
(15) 例えば「爬竜船競漕及び帰唐船の図」（軸装、首里城公園蔵）の画風は①～③に酷似している［首里城公園管理部 2012：P.20］。

〔付記〕本稿を作成するにあたり、本書の執筆者の方々に加え、以下の機関・個人のご協力・ご教示をいただいた。特に記して、心より深謝申し上げたい。

浦添市美術館・京都大学総合博物館・滋賀大学経済学部附属史料館・首里城公園管理センター・青柳周一氏・岩崎奈緒子氏・上江洲安亨氏・平川信幸氏・山田徹氏

【参考文献】

＊各文献が主な分析対象とする、または写真画像を掲載する屏風の番号（P.145-146）をカッコ内に記した。
安里進　2000「琉球王国と琉球貿易図屏風」『滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要』33（②）
安里進　2009「首里城那覇港鳥瞰図の系譜」上間常道ほか編『琉球絵画展―琉球王朝から近代までの絵画―』沖縄文化の杜
板井英伸　2008「『那覇港図屏風』にみる 19 世紀那覇港の船」『比較民族研究』22（①～⑥）
岩崎奈緒子　2001a「「琉球貿易図屏風」の成立について―下貼文書の検討から―」『滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要』34（②）
岩崎奈緒子　2001b『琉球貿易図屏風』滋賀大学経済学部附属史料館（②）
大熊良一　1971『異国船琉球来航史の研究』鹿島出版会
沖縄県教育庁文化課編　1978『沖縄県文化財調査報告書 11　県内絵画遺品調査報告書』沖縄県教育委員会（⑤・⑥）
沖縄大百科事典刊行事務局編　1983『沖縄大百科事典』上・中・下　沖縄タイムス社
沖縄美術全集刊行委員会編　1989『沖縄美術全集』4（絵画・書）　沖縄タイムス社（⑤・⑥）
加藤健二　2007「琉球絵画「琉球進貢船図屏風」に描かれた内容の分析と考察―当時の那覇の生活文化を探る」『武蔵野美術大学研究紀要』(38)（②・③）
鎌倉芳太郎　1982『沖縄文化の遺宝』2 分冊（本文編・写真編）　岩波書店
紙屋敦之　1990『幕藩制国家の琉球支配』校倉書房
九州国立博物館編　2006『開館記念特別展　うるまちゅら島　琉球』同館（①～③、④・⑤）
佐々木利和編　1998『民族誌資料としての琉球風俗画の基礎的研究』東京国立博物館（平成七～九年度日本学術振興会科学研究費基盤（B）研究成果報告書）（②）
渋沢敬三編著　1965-1968『絵巻物による日本常民生活絵引』角川書店
謝敷真起子　1998a「琉球交易港図考」①『きよらさ』18　浦添市美術館（①）
謝敷真起子　1998b「琉球交易港図考」②『きよらさ』19　浦添市美術館（①）
謝敷真起子　1999 「琉球交易港図考」③『きよらさ』23　浦添市美術館（①）
謝敷真起子　2000a「琉球交易港図考」④『きよらさ』25　浦添市美術館（①）
謝敷真起子　2000b「琉球交易港図考」⑤『きよらさ』26　浦添市美術館（①）
首里城公園管理センター編　2002『琉球王朝の華―美・技・芸―（首里城公園開園 10 周年記念企画展）』海洋博覧会記念公園管理財団（⑥）
首里城公園管理部編　2012『首里城に魂を！―国内唯一の赤い城二十年のストーリー―（首里城公園開園 20 周年記念特別展）』海洋博覧会記念公園管理財団（⑥）
関地久治・庄野雅彦　1998「紙本著色「琉球交易港図」修復報告」『浦添市美術館紀要』7（④）
豊見山和行　2004a「モノと図像が語る琉球史（上）」『沖縄タイムス』1 月 5 日（②）
豊見山和行　2004b「モノと図像が語る琉球史（下）」『沖縄タイムス』1 月 12 日（②）
豊見山和行　2012「船と琉球史―近世の琉球船をめぐる諸相―」岡本弘道編『船の文化からみた東アジア諸国の位相―近世期の琉球を中心とした地域間比較を通じて』関西大学文化交渉学教育研究拠点（②）
那覇市歴史博物館編　2011『那覇の誕生祭―浮島から那覇へ―』同館（②・③・⑤・⑥）
福田アジオ　2007「生活絵引編纂の世界的意義」『神奈川大学 21 世紀 COE プログラム　シンポジウム報告 4 ／第 2 回国際シンポジウム　図像・民具・景観　非文字資料から人類文化を読み解く』神奈川大学 21 世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議
堀川彰子　2008「一九世紀以前の那覇を描いた俯瞰的絵図の基礎研究―年代・構図・系譜―」『史林』91-3
有限会社文化財保存　2001「「琉球貿易図屏風」六曲一隻 保存修理報告書」『滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要』34（②）
渡辺美季　2003「近世琉球における外国人漂着民収容センターとしての泊村」沖縄研究国際シンポジウム事務局編『第四回「沖縄研究国際シンポジウム」ヨーロッパ大会　世界に拓く沖縄研究』